

# おれんさい

(今回は自分のためのひとり言です)

ある店が内部の改造にかかっているのを見かけて、それから何度か、どう変ったかを知りたくて前まで行った。今日、これを書いているのは五月二六日だが、朝行ってみたら戸がしまっていて、夜の七時すぎにも同じ状態で、様子はさっぱりわからない。

改造の職人が仕事をしているのを見たのは今日より十日、あるいは半月前で、職人の仕事はとうに終わっているはずだ。

軒先を借りただけの店、と言ってはちょっと小さくなりすぎるが、大体はそんな感じの店でしかない。どんなにいじっても、十日も半月も改造の日数はかかるわけがない。

○

私とその店へ最初に入ったのは、もう何年前になるか、

ることにした。ちょっと飲めて、めしが食えたらどこでもかまわないと思ってそうしたのだ。

「そんならここや」

Tが言った。

私が金太郎とアダナをつけていたTは、若くて丸顔で(頭も五分刈ぐらいで)小ぶとりで、声が少しカン高いのが特徴だったが、そのときの声はいまでも思い出せる。

○

もうわかっているように、そんな具合で入った店というのが、改造にかかったまま、どう変ったのか、今日現在ではさっぱりわからない店だ。

私は、その店のなじみになってしまって、結局何年ぐらいつづいたか。五年ではきかないと思う。ここ数年は全然行かなくなっていたし、改造にかかる前ずっとその店は休んでいたから、経営者が変ったの改造なのか、経営者はそのままで店の造作だけ変えているのか、前と同じ商売をするための改造なのか別の商売用の改造なのか、一切不明だ。

けれども、わからなくて不明で、頼りない話は話でありながら、その店のことは私の気持ちの隅にいつもひっかかって消えるときがない。

釜ヶ崎へ同勢十数日できて、ドヤの三室か四室を人の世話で借りることにした夜だった。

一つの飯場が急に引越すことになって、行先きが整うまで、オヤジ夫婦と子供三人に十人ぐらいは別に親しい飯場に間借りし、残った十数人は一応私が預った形で釜ヶ崎へきたのだ。そしてドヤからそれぞれの現場へ出る段取りで、もちろん「諸式」の酒・タバコ・軍手・風呂券などはなくなる代りに、毎日の現金貸しをふやすことにして、そのほかに現場までの交通費や三食の食費や、当面必要なカネは私が持たされていた。

それで気が大きくなった、ということはない。むしろ気が小さくなっていった。マチガイをしないようにと思っ

て。部屋割りをきめ、みんな釜の街へ出かけることになって、私はまあ世話役ふうな顔はしていたものの、実はまきり釜を知らない時だったから自然と取り残された。しかし、めしを食わずには眠れない。

おかれてドヤを出ると(出たところが釜のいわゆる銀座通りだった、当時はそれを知らない)、すぐFとTの二人に会った。FとTも一緒に飯場から来た仲間だが、やはり釜に馴れてなくてウロウロしてるのだった。

で、私たち三人は、出会った場所の一番近くの店へ入

ならばその店の名はこうだとはっきり書いて、誰か最近の様子を知ってる人の教えを待てばいいのだが、それはしたくない。私は自分が釜ヶ崎ではじめて酒をのみ、その後長く釜と縁をもつようになった店について、自分ひとりで思い出したいし、自分ひとりで変化の成行を眺めたい考えでいる。

○

きのう、飛田本通りで、あとでその店へ一緒に行ったことのあるIとすれちがった。酔っぱらってふらふらしているのど声はかけなかった。ずいぶん老けこんでいた。Fはすっかりアル中になってしまったと、これは風の便り程度に聞くだけで、Tは世帯を持って神戸の公団住宅の十何階だかにいる。梅田で一度会ってハシゴ酒をやった。

そのほか、当時の飯場仲間のKや、名前を忘れてしまった何人かと、たまにそのへんで会う。

その店で飲みなれた酒と、いま私が好んで飲む酒は銘柄も味もまるでちがってしまったが、酒はやはり飲めば酔う。

(て)